論 文 要 旨

女性医師 M. P. ジャコービーの月経成因論の一考察
―19 世紀後半米国における科学知のジェンダー・バイアスをめぐって―

横山美和

本論は、19 世紀後半のアメリカで展開された、女子高等教育および医学教育と「月経」をめぐる論争を核としながら、女性医師メアリ・パトナム・ジャコービー（Mary Putnam Jacobi 1842-1906）の著作に焦点を当て、当時のジェンダー・バイアスの様相と抵抗的な科学知の生成について考察するものである。本論では、ジェンダー・バイアスを、「男性と女性のカテゴリーを分割し、固定化、差異化、特性化する際に作用する偏向」として設定する。

19 世紀後半のアメリカにおいては、高等教育や医学教育に女性が本格的に進出するようになったが、その是非やあり方を巡って、「月経」の科学的説明を論拠に盛んな議論が行われた。このことは、女子高等教育史や医学史においても触れられてきたが、その内実は必ずしも詳細に検討されていないのが実情である。論争の火付け役であるエドワード・クラーク（Edward H. Clarke）医師が 1873 年に出版した『教育における性別、あるいは、女子のための公平な機会』（*Sex in Education*）を代表とするような、月経の説明は、「科学」を根拠としているだけに大きな影響力をもった。しかし、科学を根拠としているとはいえ、その言説は女性の社会的進出を抑制しかねないものであった。これらの科学言説には、ジェンダー・バイアスが作用している可能性がある。女子高等教育・医学教育進出を抑制するような言説に対して、ジャコービーは、『月経中の女性の安静に関する問題』（*The Question of Rest for Women during Menstruation*, 1877）を出版し反論した。同書に関しては、高名な医学賞を受賞したことから度々言及されるが、その内容が、当時の科学知の枠組みから十分に精査されているとは言い難い。

したがって、第 1 章では、ジェンダー視点を取り入れた医学史における月経認識研究と、ジャコービーの月経成因論に関する先行研究を検討する。先行研究では、ジャコービーが実験によって女性被験者の尿中の尿素や脈拍等を計測していることなど、実験に対しての考察が不足していることから、当時の栄養学研究の文脈に位置づける必要性が確認された。また、本論では、分析視点としてフェミニズム科学論における科学知のジェンダー・バイアスの視点を採用する。本論においては、価値中立とされがちな科学知であっても、時代の要請や社会構造に影響を受けているものと捉える。

第 2 章では、ジャコービーの歴史的位置づけを行うため、アメリカの医学教育・女子医学教育の歴史、ジャコービーの経歴、および、パイオニア女性医師であるエリザベス・ブラックウェルとの姿勢の差異について明らかにする。19 世紀のアメリカにおいては、非正統派医学の興隆に伴い医師が過剰気味となり、女性医師が男性医師と競合することが問題化し、女性医師を排除するための理由が必要となったの

であった。医学領域に女性が進出するようになってから約 20 年後、ジャコービーは女性として初めて名門パリ医学校に入学した。ジャコービーは、医学における性別役割分担や女性の特性論を否定する姿勢をもっており、ブラックウェルとはこれらの点において異なっていた。

第 3 章では、ジャコービーが批判の対象とした、当時の主流の月経成因論と、クラークが展開した月経成因論の特徴と意義について論じる。19 世紀においては、「自然排卵説」の登場により、月経はそれまでの「余剰血液の穏やかな排泄」という認識から、「動物の発情と同一」であるという認識へと変化した。また、クラークの月経成因論は、月経は発達にも必要な建設的な排泄現象としたところに特徴がある。クラークは、19 世紀もっとも影響力のあった化学者リービヒの栄養論を選択的に援用しながら、筋力の行使や生命活動によって組織が分解されるため、分解された組織が滞りなく排泄されることと、その後の安静によって補給されることを重要視した。したがって、女性は知的活動にエネルギーを注ぎ過ぎると、排泄が滞り健康を害し、さらには生殖器組織の修復のための栄養も不足し発達を妨げるとした。これらの月経認識は、女性が生理学的宿命よって「負荷」をかけられているために、男性とは異なる生活様式が必要であるという主張の根拠となったことを論じた。

第 4 章においては、女子高等教育推進論者や実際の大学卒業生からの反論について扱う。女子高等教育推進論者たちは、クラークが強引にアメリカ女性の健康悪化を女子高等教育に結び付けていると批判した。大学卒業女性協会は、大学卒業女性 705 名の健康アンケート結果を分析し、『大学卒業女性の健康統計』（*Health Statistics of Women College Graduate,* 1885）を出版した。その報告書によれば、大学を卒業した女性の 8 割近くが健康であることが証明され、クラークの説に有効な反論を加えることとなった。

第 5 章では、ジャコービーの月経成因論について考察した。ジャコービーは、268 名の女性の健康調査を考察し、半数近くが月経時に困難を抱えていないことを見出した。そして、既存の理論の検討を経て、新たな月経成因論を構築することとしたのである。ジャコービーは、出血の原因としては、女性体内の栄養状態の変化にあるという仮説を立て、女性被験者の尿中の尿素や血圧、体温等を 1-3 か月にわたって計測することによって、それらの値が月経に関わって変化し、多くのケースで月経前に上昇することを見出した。リービヒは、尿素は体内組織の分解、つまりエネルギー消費度合いの指標となると考えていたが、ジャコービーは、活動のエネルギー源は組織自体ではないという新説を支持した。その上で、女性は、周期的に体液に栄養素を蓄えることによって血圧がわずかに上昇することから、付随的に組織の分解も活発となり、月経前は尿素の排出が増えるとした。そして、妊娠しなかった場合に子宮内膜から出血することが月経であると捉えた。これは、栄養が正常であれば月経時には安静は必要ないという結論を導くこととなった。

終章では、本研究の結論、意義、課題を示す。本研究の意義は、19 世紀後半アメリカ社会における科学知のジェンダー・バイアスを顕在化させたこと、フェミニズム科学論に基づいて、ジャコービーの統計研究と実験データの解釈を行ったことの 2 点である。